

# 本報告書の要約

## 第1章 高校生の学習行動

### (1) 教科の好き嫌い

高校生が好きな教科のベスト3は、①体育(とても+まあ好き=65.6%)、②芸術(58.8%)、③地歴・公民(45.0%)。国語、家庭、英語、数学、理科の5教科については、「とても好き」と「まあ好き」を合わせても4割程度にとどまる。成績上位者が相対的に好きなのは英語、数学、地歴・公民、理科であり、中位者や、特に下位者は体育、芸術を好んでいる。(図1-1、表1-1)

### (2) 主要5教科の理解度

理解度の高い順に、国語、地歴・公民、数学、英語、理科。数学と英語の2教科については、第1回調査よりもわずかだが理解度が低下した。(図1-2、図1-5、図1-6)

### (3) がんばって勉強したい教科

回答は主要5教科に集中。順に並べると、英語84.8%、数学69.1%、国語42.6%、理科35.4%、地歴・公民29.7%であり、とりわけ英語と数学への集中度が著しい。(図1-7)

### (4) 授業の受け方

「黒板に書かれたことを、きちんとノートに書く」のは9割を超える。他方、「黒板に書かれていなくても、先生の話で大切なことはノートに書く」のは6割にとどまる(「よくある」のみだと2割)。「授業の内容が難しいと思う」と答えたのは4人に3人に及び、「授業の内容が簡単すぎる」とする回答(1割)を大幅に上回る。(図1-8)

### (5) 家庭学習の頻度

家で週に何日くらい勉強するかを全体としてみると、「ほとんど毎日(6~7日)」が22.0%、「週に半分以上(4~5日)」が22.9%であり、両者を合わせると44.9%が週に4日ないし5日以上学習する習慣をもっている。逆にいえば、過半数は家庭学習定着型ではない。他方、「家ではほとんど勉強しない」と答えた生徒は23.4%と2割を超えている。(図1-9)

### (6) 勉強時間、テレビ視聴時間

勉強時間がもっとも長いのは、第一に日曜日で1時間35分、第二に学校が休日の土曜日で1時間21分、第三に平日の1時間17分である。休日の土曜日の家庭学習時間は平日をわずかに上回るもの日曜日を下回っており、また「ほとんど勉強しなかった」者は土曜日(休日)でもっとも多い。平日のテレビ視聴時間の平均(概算)は、1時間55分である。(図1-12)

### (7) テスト勉強の開始時期

最頻値は「1週間くらい前から」(31.0%)にあり、これに「2~3日くらい前」(16.7%)、「4~5日くらい前」(16.1%)、「10日くらい前」(15.8%)が続く。「前日から」「当日の朝くらい」「ほとんどしない」といういわゆる一夜漬けタイプは、1割程度である。(図1-20)

### (8) 家での勉強内容

家での勉強の内容として半数を超えているのは、第一に学校の宿題(81.1%)、第二に学校の授業の予習(59.2%)である。この2つ以外はいずれも半数を切っている。学校の授業の復習をあげるのは39.1%、3分の1強であり、復習ではなく予習中心という高校生の家庭学習の特徴が浮かび上がってくる。(表1-3)

### (9) 家での勉強の様子

「出された宿題をきちんとやっていく」(74.2%)、「家族に言われなくても自分から進んで勉強する」(71.1%)、「嫌いな科目の勉強も一生懸命する」(56.1%)、「予習をしてから授業を受ける」(51.8%)、「机に向かったら、すぐに勉強にとりかかる」(49.4%)、「計画を立てて勉強する」(40.4%)。全体に自主的・積極的な学習態度をとっているとする肯定的回答が目立つ。(図1-23)

### (10) 学習塾と予備校

学習塾と予備校に通っている者は15.0%と少数派である。通塾日数は、週2日が約半数。通っている塾・予備校の種類は、「学校の勉強がわかるようになるための補習塾」が35.8%、「大学や短期大学を受験するための進学塾」が46.8%、「その他」1割である。(図1-25、表1-4)

### (11) 通信教育、家庭学習教材と学校補習

「今年の夏休みに、学校の補習授業を受ける予定だ」が49.1%と圧倒的に多く、これに「学校で朝や放課後の補習授業を受けている」が26.3%で次ぐ。他の学習機会の利用者は相対的に少数である。高校の進学状況によって非常に大きく異なっており、①進学校(第2ランク)では、朝や放課後の学校補習と夏休みの学校補習への参加率が高く、総じて、学習の学校への依存度が高い、②超進学校(第1ランク)では、通信教育受講率が高く、また夏休みに塾や予備校の夏期講習に行く予定の生徒が多いなど、相対的に学校外学習機会への依存度が高いという特徴がある。(図1-28、表1-5)

### (12) 勉強の仕方

高校生の半数以上が「よくする」「時々する」と答えているのが、①問題集の問題を解く(75.1%)、②教科書や参考書にアンダーラインを引いたり、カラーマーカーを塗る(64.3%)、③辞書(英語・国語など)を引く(64.3%)、④教科書をくり返し読む(56.7%)の4つである。参考書を読む(42.6%)よりも問題集を解くこと、単に教科書をくり返し読むよりもアンダーラインをつけたりマーカーを塗りながら読むという勉強方法のほうが一般的である。(図1-29)

### (13) 勉強方法のタイプ

全体としてみると、①通信教育、学習塾の教材や自分で買った教材中心(6.5%)よりも学校で使う教材中心(92.8%)、②市販の要点整理などを使う(11.7%)よりも自分で整理しながら勉強する(87.4%)、③毎日こつこつ勉強する(14.1%)よりも試験の前にまとめて勉強する(85.5%)タイプが支配的である。④参考書中心(29.3%)に比べて問題集中心(69.9%)でもある。⑤できるだけ暗記する(56.5%)か、できるだけ考えようとする(42.9%)かは相半ばしている。進学者の多い高校で相対的に多いのは、①(試験前にまとめてよりは)毎日こつこつ勉強、②(できるだけ暗記するよりは)できるだけ考えようとする、③(復習中心よりは)予習中心、④(やさしい問題を数多く解くよりは)難しい問題をじっくり考える、などのタイプである。(図1-30、図1-31)

### (14) パソコン等のメディア利用

群を抜いて利用度の高いのが「テレビゲームをする」(「よくある」と「時々ある」の合計58.7%)で、これに「家でパソコンを使う」(21.2%)が続く。これ以外の利用率はいずれも1割未満であり、とりわけ家でパソコン用ないしゲーム機用の学習ソフトで勉強しているのは、ごくごく少数にとどまる。(図1-34)

## 第2章 高校生の学習観・成績観

### (1) 現在の成績の自己評価

中位の3カテゴリーに6割が集中。ただし、学年の中で、真ん中あたりよりも下位に自分の成績を位置づける生徒のほうが相対的に多い。女子にちょうど真ん中が多く、男子はその分相対的に下位に位置づける傾向がある。(図2-1、図2-2)

### (2) どのくらいの成績がとれたらよいか

全体としてみると「上のほう」から順に、1. 43.1%、2. 28.8%、3. 16.3%であり、この3カテゴリーで9割弱に達する。逆に「真ん中」から下の成績でよいと答えた生徒は(選択肢4、5、6、7)合計でも約1割にとどまる。属性別で希望する成績の水準には大きな差異がみられるが、どのような成績の生徒ではあっても真ん中よりも高いレベルの成績アスピレーションをもっている。(図2-1、図2-4、図2-5)

### (3) うんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思うか

現在の成績はともかく、がんばって自分の能力をすべて発揮したとすれば、85.9%の生徒が学年で中の上より上位の成績がとれると考えている。これを能力の自己概念と呼べば、それは、女子より男子で高く、また進学率の高い高校、とりわけ進学校(第2ランク)で高い。(図2-1、図2-6)

### (4) 成績観

「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい」(56.2%)と「できるだけ

い大学に入れるよう、成績を上げたい」(51.4%)に回答が集中。「ふつうの生活(ほどほどの学力)志向」(前者)と「名門大学志向」(後者)が拮抗している。この2つに「どこかの大学・短大に入れる学力(ともかく合格)志向」が続く(27.8%)。学校内で中位以上の成績をとりたくと考える生徒が大半だが、そこには「ふつうの生活(ほどほどの学力)志向」「どこかの大学・短大に入れる学力(ともかく合格)志向」が相当程度含まれており、高校生の成績アスピレーションが単純に高い水準にあるとはいえない。(図2-8)

### (5) よい成績をとるためには

ベスト3は、努力(84.9%)、授業をしっかり聞く(75.9%)、上手な勉強法(73.0%)。ここには、高校生の、精神(努力)主義、自分主義、学校重視(日常的構えの重視)、技術主義(効率的な学習法)が現れている。成績上位者ほど、精神主義(努力と強い意志)、自分主義、学校重視、技術主義が強く、成績下位者で、生まれつきの能力と運の2つが重要とする者が多い。(図2-11、図2-12)

### (6) 勉強の効用

一生懸命勉強することは、第一に会社や役所に入って高い地位につく(出世する)のに、第二に一流の会社に入るのに役立つと考えられている。つまり「職業的な成功、地位の達成」の手段として役立つと考えられている。成績上位者ほど、学びの本質的な効用(尊敬される人になる、社会のために役立つことをする、精神的に豊かな生活をする等)を認識し、下位者ほど学歴の経済的社会的価値のみを信仰する傾向がある。(図2-14、図2-15)

### (7) 勉強していてうれしいと感じるとき

高校生の大多数が「うれしい」と感じるのは、第一に「難しそうな問題が自分で解けたとき」(67.3%)、第二に「テストの点数が上がったとき」(64.1%)である。進学率の低い高校の生徒ほど、テストの点数という具体的な結果が現れたときに学習上の達成感を感じる傾向が強い。(図2-16)

### (8) 知的体験と関心

対象に対して「すばらしい」とか「ふしぎだ」と思う知的な体験に注目してみると、生き物や自然については7割弱、社会のしくみや歴史のできごとは55.1%、数学の考え方や解き方は46.8%が、そのような体験を「よく」あるいは「時々」していると答えている。自然や社会について、調べたり考えたりする(数学については解き方を考えたり工夫する)ことが「好き」と答えた回答は相対的に少なく、「よくある」と「時々ある」を合わせても35~48%程度にとどまっている。(図2-18)

### (9) 勉強上の悩み

「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」という回答がもっとも多く、3人に2人。学習をめぐる悩みや不満は、「こつこつと努力できない」自分に対して向けられており(65.5%)、さらに「上手な勉強の仕方がわからない」(64.4%)。これら3者に、必要な学習の

量が多すぎることや教科内容に対する不満が続く。課せられた学習内容の意義を、自分なりに咀嚼できない高校生の苛立ちが現れている。(図2-20)

#### (10) 進学希望段階

もっとも多かったのが「四年制大学まで」で69.7%、これに「専門・各種学校まで」(9.4%)、「大学院まで」(7.2%)、「短期大学まで」(5.9%)、「高校まで」(5.0%)が続く。(図2-21)

#### (11) 四年制大学進学希望の内容

私立大学よりも国公立大学。理系より文系。推薦入試よりも一般入試で。圧倒的多数が浪人なしの現役での入学を希望。入学するのがやさしい大学と難しい大学は志望が拮抗しているが、やや、やさしい大学に偏っている。(表2-3)

#### (12) 希望する職業

第1位が準専門職(30.3%、看護婦、先生、編集者、デザイナーなど)、第2位が伝統的な専門職(18.4%、医者、弁護士、研究者など)で、この2つではほぼ半数に達する。高校生の希望職業は、(準)専門的な仕事に大きく偏っている。(図2-24)

### 第3章 比較分析 小学生、中学生、高校生の学習行動と意識の比較

#### (1) 教科の好き嫌いと理解度

各教科を「好き」と答える者は小学生でもっとも多く、中学生、高校生になると減少する。教科別にみると、変化が小さいのは社会で、反対に変化が大きいのは理科である(図3-1)。その原因とも考えられる授業の理解度は、小学生から高校生にかけて段階的に低下する。理解度の低下が特に著しいのは理科である。(図3-2)

#### (2) 家での勉強

小学生から高校生になるにつれ、家での学習機会は平日から休日へと移行している(図3-3~3-5)。中学生と高校生の家での勉強の種類を比べると、高校生は学校の授業を中心としたものであり、中学生は学校と学校以外の学習機会を併用したものである。(図3-6)

#### (3) 学校外学習機会の利用

学校以外の学習機会の利用率がもっとも高いのは中学生である。高校生の利用率は小学生より低い。一方、学校が提供する正規の授業外の学習機会(補習授業、学校の夏期講習)の利用率は高校生が中学生を上回る。(図3-7)

#### (4) 勉強の仕方

高校生と中学生の勉強の仕方を比べると、高校生の勉強の仕方は①試験の前にまとめて勉強する、②学校で使う教材中心、③できるだけ考えようとする、④自分で整理しながら勉強する、

⑤予習中心、⑥やさしい問題を数多く解く、という特徴がある。(図3-8)

#### (5) メディアの利用

学校や家庭でのメディアの利用率は高校生がもっとも低い。学校でのパソコン利用率がもっとも高いのは中学生であり、半数近くが利用している。(図3-9)

#### (6) 成績観

現在の成績の自己評価は、小学生が中学生、高校生に比べて「真ん中」に集まる傾向にあり、学校段階の上昇とともに成績の序列が明確になっていくことがわかる(図3-10)。「どのくらいの成績がとれたらいいか」(図3-11)、「うんとがんばればとれる成績」(図3-12)では、小学生と高校生は上位に集中するが、中学生はやや控えめである。なお、よい成績をとるために大切なものについては、小学生、中学生、高校生ともに「努力」と答えた者が半数以上を占めた。(図3-13)

#### (7) 学習観

##### a) 一生懸命勉強することの効用

勉強することが、①社会のために役立つことをするのに、②尊敬される人になるのに、③精神的に豊かな生活をするのに、④よいお父さん、お母さんになるのに、⑤趣味やスポーツなど楽しく生活するために役立つと答えた者は高校生よりも中学生のほうが多く、高校生のほうが勉強の効用を限定的にみている。(図3-14)

##### b) 勉強をしていて感じること

勉強をしていて「すばらしい」とか「ふしぎだな」と感じる機会は、小学生には多いが、中学生になると減少する。学校段階の上昇とともに、勉強から学ぶことが限定的になっていることがわかる。(図3-15)

#### (8) 学習上の悩み

学習上の悩みは、学校段階に応じて変化する。小学生の悩みは「どうしても好きになれない科目がある」ことであり、中学生の悩みは「頭の悪さ」や「努力が報われない」など、自己の能力に関連する。高校生の悩みは「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」「世の中に出てから、もっと役に立ちそうな勉強がしたい」など、学習内容に対する疑問にある。(図3-16、図3-17)